

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 松野 美海

論 文 題 目

格交替を許容する日本語感情動詞の格体制についての研究

論文審査担当者

主査	名古屋大学准教授	宮地 朝子
委員	名古屋大学教授	釘貫 亨
委員	名古屋大学教授	大室 剛志

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

現代日本語には、「土産を喜ぶ」「土産に喜ぶ」のように、述語動詞の補語を表示する格助詞ヲ/ニの交替を許容する動詞が存在する。本論文は、このような二様の格体制をもつ感情動詞について、意味的・構文的側面から、ヲ格をとる場合とニ格をとる場合との差異を明らかにするとともに、日本語における格選択の要因を探り、さらには格体制の多様性に説明を与えようとするものである。

第1章では、問題の所在を確認し分析対象としての感情動詞群 114 語を選定する。第2章では先行論の問題点を確認したうえで、感情動詞群の意味的・構文的特徴を考察する。まず格体制により、感情主ガ格のほか、ヲ格のみをとるヲ格感情動詞（コノム・ニクム等 33 語）、ニ格のみをとるニ格感情動詞（トキメク・アキレル等 27 語）のほか、保留群 11 語を除いて、ヨロコブ・ナゲクなど 28 語をヲ/ニの格交替を示すヲ/ニ格感情動詞と位置づける。さらに、格体制のタイプ別に、「あきれた！」のような一語文的表出用法の有無、受身化・使役化の可否、ヲ・ニ格名詞句の運用上の表示率、ヲ・ニ以外の格形式との共起率といった観点から、感情動詞群の多様性を記述する。

第3章では、同じく格体制のタイプ別に、感情動詞のアスペクト的特徴と、ヲ・ニ格名詞句の時間的性質を観察する。第2章の成果と併せ、格体制のタイプに応じて一定の傾向がたしかに認められ、ヲ格名詞句は未実現事態を中心として概念化された事態が立ちやすく、ニ格名詞句は感情生起の現場と不可分な眼前の事物など確定性の高い事物が立ちやすいとする。さらに、ヲ格感情動詞には動作動詞との類似性が、ニ格感情動詞には形容詞に近い性質が認められ、ヲ/ニ格感情動詞は概ね、ヲ格感情動詞・ニ格感情動詞双方の特徴を併せ持つといえるとする。一方、論者は同時に、いずれの観点でも必ず異なる様相を見せる語群が見出されること、ヲ/ニ格感情動詞の格選択が、必ずしもヲ・ニ格名詞句の傾向性や、ヲ格感情動詞、ニ格感情動詞の特徴から導出できるわけではないことを具体的に示し、ヲ/ニ格感情動詞の格選択の要因の解明には、個々の語についての事例研究が欠かせないとする。第4章～第6章がその実践となる。

第4章では現代語ヨロコブの様相を観察する。ヨロコブは、ヲ格に未実現事態のみならず、既実現事態も一般論等の非個別的事態も表れる点で異例の様相を示すが、ニ格に未実現事態が表れることはない。一方、ヲ格には節が立ちやすい。ヨロコブにおいてヲ格は、意味役割の上で典型的な〈対象〉から、事態節など〈対象〉らしくない成分までを、幅広く格成分として取り込んでいるとする。第5章ではタヨル、第6章ではオソ(レ)ルについて、格選択の様相の歴史的展開を観察する。タヨルはニ格偏重からヲ/ニ格両用へ、オソ(レ)ルはヲ/ニ格両用からヲ格偏重へ変化した。格選択の様相と変化を通時的に考察することで、各々の動詞の格体制の変化には、動詞の意味・構造的変化が大きく関与すること、故に個々の動詞によって格選択に関与性の高い要因が異なるということを具体的に示す。第7章で全体の議論をまとめ、課題と展望を述べる。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

日本語感情動詞のヲ/ニ格両用の現象は、様々な立場で言及されてきたが、従来、現代語共時態の内省に基づく断片的な記述や概括的な傾向の指摘に留まっていた。感情動詞という特異な語群の現象として、また個人差を含む文体的な運用上の差違として、一般的な議論に結びつきにくい状況にあった。本論文はその状況を打開し、ヲ/ニ格の多機能と個々の感情動詞の意味・構造的性質、さらに各々の歴史的展開の絡む複雑難解な課題に対して正攻法で取り組み、着実な成果と発展的課題を明示した好論である。

ヲ/ニ格感情動詞の格選択は、ヲ格ニ格の機能と個々の動詞の表す感情の時間的な意味特徴、さらにその意味特徴が要求する構文的な制約条件が関与するとし、ヲ/ニ格交替の様相の差違は、その複数の要因の優先性の決定づけが動詞によって異なるために生じているとする結論は、具体的な根拠とともに明示され、大きく説得的である。

この成果への到達は、本論文の堅実精緻な手法に導かれたものである。まず、課題とするヲ/ニ格の交替を、感情動詞に観察される特異な現象面とせず、格の考察一般において至極基盤的な観点・手法を適用して整理している点があげられる。従来、離散的、断片的に導入されるに留まっていたテストを、対象語群に網羅的に適用して包括的な整理に到達した。また、共時・通時の両面において、コーパスを含む資料を博搜して採取した実例をデータとしたことも、客観性と再現性を担保する研究手法として評価の要点となる。従来の考察は主として現代語を対象とし、作例・内省に基づく議論に偏重し、一々の対象動詞に対して感情動詞か否か、ヲ/ニ格両用かといった容認性の差に起因した異論によって議論が収束しづらい嫌いがあった。これを堅実に回避し議論の土壌を整えた点も功績といえる。さらに、論者が目的の一つとして「ヲ/ニ格感情動詞の振る舞いと、ヲ/ニ格の機能がどのように関係づけられるかを探ること」を明示している点も重要である。ヲ格・ニ格の機能の原理的な一般化を目指すのではなく、個々の動詞の意味・形態、統語的性質とその歴史的展開を踏まえ、現象面を真摯に捉えるまなざしを貫き、この姿勢によって、動詞全体の格体制の多様性という一般言語学的な原理的課題にも示唆を与えうる、説得的な結論を導いた点が高く評価できる。

簡潔な筆致と、安易な一般化を許さない分析姿勢が全体に貫かれ論旨は明快である。その長所と表裏をなして、先行論の概要の提示や問題点の指摘において論述が簡潔に過ぎる部分も見受けられた。ただし改善可能で大きな瑕疵ではない。内容面では、感情動詞以外に見られる格交替、ヲ/ニ格の機能変化の可能性など検討すべき課題も多い。格選択要因の優先順の決定づけの有り様までを明らかにするには、感情動詞個々の史的展開を含む記述観察の蓄積も、必須ながら緒に就いたばかりである。しかしこれらはいずれも本論文を端緒とする発展的課題であり、論者も自覚するものである。

以上より、審査委員一同は一致して、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと判定した。